

Panel Discussion

Fri. Nov 14, 2025 8:30 AM - 10:00 AM JST | Thu. Nov 13, 2025 11:30 PM - 1:00 AM UTC Room 8

[PD4] Panel Discussion 4 Challenges in IBD Surgery: Staged Procedures, Laparoscopy, and Pouch Reconstruction

司会：小金井 一隆(横浜市立市民病院炎症性腸疾患科), 水島 恒和(獨協医科大学外科学 (下部消化管) 講座)

[PD4-3] Visceral Obesity as a Predictor of Ileal Pouch Reachability in Ulcerative Colitis: A Prospective Single-Center Study

Yuki Horio¹, 内野 基¹, 友尾 祐介¹, 野村 和徳¹, 木場 瑞貴², 福本 結子², 長野 健太郎¹, 伊藤 一真², 今田 純子², 楠 蔵人¹, 宋 智亨², 桑原 隆一¹, 木村 慶², 片岡 幸三², 池田 正孝², 池内 浩基¹ (1.Inflammatory Bowel Disease Surgery, Hyogo Medical University, 2.兵庫医科大学病院下部消化管外科)

【目的】潰瘍性大腸炎（UC）手術症例において、肥満は大腸全摘術・回腸囊肛門吻合（IPAA）を行う際の技術的困難リスクを高めることが報告されている。今回、IPAAにおける内臓脂肪と回腸囊の到達可能性との関連を前向きに検討することを目的とした。

【対象】2017年4月から2024年10月までの間に当科にて2期分割のIPAAを受ける予定としたUC患者を登録した。恥骨結節下縁の指標を用いて、術中に回腸囊肛門管吻合術(IACA)へ変更が必要であった群を転換手術群と定義した。内臓脂肪面積と様々な解剖学的指標を術前CTを用いて測定し、多変量解析にて転換手術の予測因子を同定した。

【結果】計106例の患者が対象となり、12例（11.3%）がIACAへの転換手術群であった。非転換手術群の患者と比較して、転換手術群では、Body Mass Index (BMI) が有意に高く ($p < 0.01$)、内臓脂肪面積が有意に高く ($p < 0.01$)、回腸末端から肛門縁までの距離が有意に長かった ($p < 0.01$)。年齢、重症度、病歴期間、術前内科治療、腹腔鏡手術などの臨床学的背景因子に関しては2群間で有意差を認めなかった。多変量解析では、内臓脂肪面積（10cm²増加あたり：オッズ比[OR]: 1.19、95%信頼区間[CI]: 1.02-1.39、 $p = 0.01$ ）が転換手術の独立した予測因子として同定されたが、BMIは同定されなかった（OR: 1.03、95%CI: 0.77-1.21、 $p = 0.72$ ）。

【結語】内臓脂肪は、IPAAを受けた患者における転換手術の独立した危険因子であった。CTを用いた術前の内臓脂肪測定は、BMIよりも回腸囊の到達可能性をより正確に予測できる可能性がある。